

SSOR 現在・過去・未来

金子 美博

1. SSOR 現在

中部支部では、2017 年秋の研究普及委員会にて承認された支部事業申請に従い、翌 2018 年 8 月 30~31 日 SSOR 中部支部 2018 を開催した。これは 60 周年記念事業である前年の SSOR 中部支部 2017 (代表・愛知県立大学奥田隆史先生) を引き継いだものである。筆者にとって、20 年前の 20 世紀に岐阜県恵那市 (図 1) で第 33 回 SSOR を開催して以来の関わりで、因縁浅からぬものを感じた。会場は、前年の愛知県蒲郡市から同県犬山市に変更した。学会会場としての良し悪しを比較して、中部支部での今後の活動の場の選択肢になりうるかどうかを見極める意図もあった。

SSOR 中部支部 2018 の参加者は 2 日間で述べ 33 名であった。発表学生 20 名に加え、一般 5 名が宿泊した。参加学生の所属は五十音順に、愛知県立大学、岐阜大学、名古屋工業大学、名古屋市立大学、名古屋大学、および早稲田大学であった。また、官公庁および民間企業の方々の参加もあった。

初日は 13 時からの開始で、オープニングは挨拶をかね、筆者が SSOR は若手のためのセミナーであること、SSOR にそれなりの想い入れがあることなどを説明した。参加学生の一般講演に続いて、関西大学の植寛成先生に「ピラミッドの最適計測プランの作成」という題目でご講演いただいた。学際的な研究であるものの、離散最適化問題が登場するなど、OR として大変興味深い内容であった。また、筆者の事前依頼を受け、関西支部の支部活動についてもご紹介いただいた。その後、一般講演が再開され、17 時で終了となった。続いて、送迎バス付の居酒屋で交流会を行った。中締めの後、宿泊施設の小部屋に戻って 2 次会を開き、23 時過ぎに初日はお開きとなった。

2 日目は、9 時からの一般講演に続いて、東京理科大学の伊藤真理先生に「医療福祉とエネルギー分野における数理最適化と政策影響分析」という題目でご講

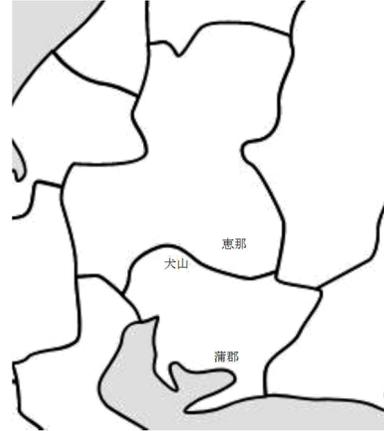


図 1 SSOR 開催地

演いただいた。内容はスケジューリング問題を扱うものであった。特に、政策影響分析における排出規制と再生可能エネルギー促進策のポリシーミックスのスケジューリング問題の分析が興味深かった。その後、最後の一般講演を経て、クロージングとして、SSOR 中部支部 2018 副代表の木村充位先生 (岐阜市立女子短期大学) から閉会の挨拶があり、正午に散会となった。

研究発表の時間は、質疑応答含め一律 15 分に設定した。合計 20 件の発表の中では、完成されたものもあれば、発展途上のものもあった。内容の程度はさておき、発表学生にとっては、知らない人の前でプレゼンすることは大変よい経験であり、質疑応答を乗り切れば、自信につながる。卒論・修論発表は言うまでもなく、就職活動の面接やグループディスカッションにも十分活かされる。「学会発表アリ」の履歴が就活のガクチカとしてもアピールできる。また、学生間の新たな交流を後押しするために、所属が異なる学生が相部屋となるような部屋割りを行った。これこそ合宿形式で行う SSOR の意義であると筆者は考えている。大学院に進学して SSOR で何度か一緒だった間柄がその後の 5 年、10 年、20 年、40 年来の研究仲間になり、将来 OR 学会をともに引っ張っていく仲間にならば、との期待もある。

一方、運営面では、事務処理の簡略化による負担軽減のため、参加申し込みや講演題目・アブストラクト

かねこ よしひろ
岐阜大学工学部電気電子・情報工学科
〒501-1112 岐阜県岐阜市柳戸 1-1
fau@gifu-u.ac.jp

登録などにクラウド環境を活用した、使いづらいという意見も寄せられたため、入力項目や方法などユーザーインターフェースの改良は今後の課題である。得られた登録情報から、発表プログラムを構成したり、部屋割りを行ったりすることは、ORの十八番である割当問題・数理計画問題の求解であるアルゴリズムを実装すれば、運営する側の負担軽減だけでなく、ORの事例研究に展開できる可能性もある。

以上が、2018年現在の中部支部でのSSORである。支部のWebページ(<http://www.orsj.or.jp/chubu/?p=2863>)でも報告しているため、そちらもぜひご覧いただきたい。加えて筆者は、関西支部のSSOR(2018年11月2~4日)にも参加させてもらい、学生に紛れて研究発表までさせてもらった。その意図は、自身の研究発信だけでなく、SSOR中部支部の宣伝もあった。同時に、ORの話聞き自身の学びとするだけでなく、運営面についても関西支部の先生方から何か学ぶことがあるのでは、との下心もあった。その期待に違わず「受付の無人化」や「朝まで宴会」など、今後中部支部でのSSORでも取り込みたいエッセンスが随所に見られ、筆者には大変勉強になった3日間であった。

2. SSOR懐古

関西と中部での二つのローカルなSSOR。前世紀ではグローバルなSSORが当たり前だった頃には到底思いもつかなかったイベントである。ここからは、過去から逃げてきた筆者とSSORとの関わりについて、恥ずかしながら弁明したい。なお、登場人物は、OR学会の内外でネームバリューのある方ばかりなので、所属に関する断り書き(当時など)はあえて省略する。

筆者が最初にSSORに参加したのは、1995年の南紀シーサイドロッジの第30回SSORであった。そのとき実行委員で活躍していたのが、現在中部支部を牽引されている茨木智先生や柳浦睦憲先生である。お二人をはじめ、京都大学の学生さんたちは参加者の要望をまるで先取りしているかのようにてきぱき行動されていて、その姿に舌を巻いた。アットホームな雰囲気、さながら研究室の合同夏合宿にでもお邪魔させてもらっているのでは、と錯覚するくらいであった。それまで筆者が参加していた学会では、ワークショップなどで宿をとにもする場合、自分よりも目上の方々と一緒に過ごす機会が多く、失礼のないように気を遣い気苦労することもあった。師匠にくっついて顔売るため関係者への挨拶回りは欠かすことなく、発表される研究には敬意を抱く。ただ詳しく知らないだけかも



図2 第33回SSOR予稿集の表紙

しれないが。

初めて参加した知らない人ばかりのSSORではそんな気遣いが全く無用で、相部屋の茨木俊秀先生には初対面にもかかわらず親しく話しかけてもらった。泊りがけのこんな楽しい学会もあったのか!というのが率直な感想であった。同世代の人たちが中心となって活躍される様子は、よい意味でひとごとを感じることはなく、刺激的な光景でもあった。

その後、筆者は中部支部の研究幹事を仰せつかることになった。支部長の中川覃夫先生から、次回のSSORは中部が当番だからやってくれないか、とトップダウンで開催依頼を受けた。当時の私としては身に余る大役であったが、ご指名の意気に感じ、右も左もわからないのに引き受けることにした。中川先生には、その後SSOR応援セミナーまで企画・実施していただき、20世紀最後となってしまったSSORに向けて多大なご支援をいただいた。先生ご専門の信頼性門下の今泉充啓先生、木村充位先生、水谷聡志先生が現在中部支部で活躍されているが、筆者がお三方と最初に知り合ったのはSSORと記憶している。時系列が前後するが、中部支部開催の前年には、土肥正先生が事務局だった第32回SSOR(呉市国民宿舎音戸ロッジ)にも参加させてもらい、翌年の青写真を描いた。一人で切り盛りするのは、至らぬ点ばかりの筆者には到底無理と判断し、増山繁先生、鈴木敦夫先生、それに中出康一先生と現在の中中部支部の重鎮の方々にも実行委員に加わっていただいた。

中部支部での開催地の選定にあたり、SSORの関係者からは、夜更けまで飲み会ができるような大部屋が会場には必要と聞かされていた。いくつかの候補地の

中から最終的には岐阜県恵那市の公営の宿・恵那荘にて開催することにした。大広間が無料で借りられることが決め手の一つとなった。

ビッグネームを使って恵那のSSORを盛り上げようと増山先生にご尽力してもらい、長谷川利治先生に招待講演をしていただいた。題目は「三題噺：OR、交通、通信」であった。近年SSOR開催の準備のために、断捨離していたSSORの過去の資料を掘り出したところ、奇しくも長谷川先生のご講演用のOHPのハードコピーが出てきた。恵那荘にて先生が分け隔てなく若い方々と談笑するお姿が思い出されふと「実るほど頭を垂れる稲穂かな」と思わずつぶやいてしまった。

残念ながら、恵那荘はその後閉鎖されてしまった。地元紙の報道でそれを知ったのはかなり昔のこと。数年前近くを通る機会があったため立ち寄ったところ、もはや建物は跡形もなく更地になりロープで囲まれていた。敷地内には雑草が生い茂り、ただ風が吹いているだけで、隔世の感がした。「過ぎるほど草ぼうぼうの夢のあと」なんて下手な句が頭をよぎり、なお一層心寂しくなった。

3. SSOR 休止

閑話休題。恵那での第33回SSORが何とか無事に終わった後、筆者にとって思いがけぬ試練が待ち受けていた。次の開催地の選定と依頼である。どのように選ばれていたのかそれまでのSSORの開催地の経緯を全く知らず、とりあえずの順番ならば次は関東あたりで、という話は伺っていた。SSOR関係者に直接的間接的に打診したがまともならなかった。そもそもOR学会には東京支部も関東地区もないことすら当時は知らなかった。支部長から幹事へのトップダウンの指令もそこにはない。

筆者のコネなし。こねなしかねこ。一文字違いの回文であることはさておき、OR学会員であることわずか5年の未経験さが露呈された。結局自分一人では打開策が見いだせず、SSOR常連参加の塩浦昭義先生に相談した。塩浦先生にはご足労いただき、SSOR創設にゆかりある研究室の関係者の方々にもご相談いただき、SSOR中断やむなしという結論に至った。まぼろしの第34回SSOR。明らかに筆者の失策である。その後時折、SSORどうなったの?と伝説になってしまったことを耳にすると後悔の念が起き、プチトラウマになっていた。そのためいつかはSSORが復活し、また日の目を浴びればぜひ参加したいと願っていた。20年来の胸のつかえを取りたい。卑しく例えれば、足の裏

のご飯粒みたいなもの。取っても食えないが、取らなきゃ気持ち悪い、そんな風に胸の奥でずっと。そのため2017年に60周年記念事業としてSSORが中部支部で開催できたことは筆者にとっては喜びひとしおであった。

4. SSOR 復活

以下SSOR復活に寄せる想いを綴りたい。

妙な表現であるが、未来は過去に巻き戻せれば、と思っている。未来に向かって過去から逃げてきたのに、また過去か、とけげんに思われるかもしれない。逃げなくてすむ誇れる過去に巻き戻したい、というべきか。第34回SSORが実現しなかった理由はいくつか考えられるが、その一つとして運営面の負担が挙げられる。ある日突然、3泊4日の若手セミナーを開催してくださいと依頼されても、大抵はドン引いてしまいさりげなく断る。負担の程度が不明で得体のしれない外部の仕事は誰も引き受けない。そのため、引き渡す運営側としては、年々負担が少なくなる、少なくするような仕組みへの改善を常に心がける。年ごとに負担が減り続ければ、もっと気楽に開催を打診できるであろうし、引き受けてくださるであろう。初めてSSORに参加した夏の日の思い出。先読みできる学生さんがテキパキ動き、指導教員がそれを見守り「とある研究室・とあるゼミナールのゼミ合宿拡張版」だったその雰囲気は忘れられない。

5. SSOR 銘柄

SSORの位置づけについても「SSOR」という名の若手ブランドとして確立されれば、と願う。OR学会の定例イベントとして、全国大会や各種研究部会やセミナーに次ぐもののOR学会を超えて、若手研究者の間にその名が知られればと思っている。「若手のための〇〇」はどこかの学会にでも見られる典型的で陳腐なイベントであるが、OR学会のそれは一味も二味も違うみたいだ。一度は参加してみたい。そんな評判になれば願ったりかなったりである。

SSORはSSOR。これだけである。何も足さないし何も引かない。SSORという旗印の下でボトムアップ的に、たとえば、学生の学生による学生のための学会、という一つの型やパターンを見いだす。「型」をいったん作ったうえで「型破り」なSSORが新たに作られることは今後の課題ではなく、楽しみである。果たして若手セミナーに最適解は存在するのであろうか。何らかのパレート解であるのか。いずれにせよ「型破り」の

ためにはまずは「型」を作ること。トップダウンで「イノベーションを起こせ」なんて素人受けな威勢のよいことばかり言っても空砲が空しくこだまするだけ。研究の進展には運・不運がつきものであるが、人脈についてはその限りではなからう。SSOR 引継ぎの失敗を糧に筆者は「研究に大切なのは金よりコネ」と主張するようになった。小生「カネコ」ではなく「コネコ」を目指しています、との冗談をよく言う。相手はキョトンとして右から来たものは左へ受け流し何ら変化なし。自我自散何も変わらずの境地である。

学会全体を見渡しても OR 学会がもっている守備範囲の広さは、OR 学会員の多様性であり、懐の広さであり、強みである。若手主体の SSOR ではさまざまな分野の方が研究発表し、忌憚のない意見が交わされる。若い頃からの交流は、誰にとっても人的財産でありコネ作りには欠かせない。コネ作りに慣れてくれば、自分から積極的にさまざまな分野の研究集会に出向く機会も増えよう。経験談であるが、違う会場で 2 回会って話をすれば大抵は親しくなる。いつもの顔ぶれの

専門家の同質集団は、確かに中身の濃い質疑応答で研究は深化するであろう。が時に、突拍子もない質問が飛び出すなど、異分野の知らない研究者からの意見が貴重な刺激になり、次なる研究への起動力となるかもしれない。

6. SSOR 今後

以上を踏まえ、今後の SSOR については、トップダウンではなく、ボトムアップを継続する。当面の間ローカル版で各支部が開催実績を積み、負担のより少ない運営のノウハウがローカルに確立され、地域的な特長も炙り出される。そのうえで必要ならば、ローカルな SSOR を統廃合し、いつの日かグローバルな全国版 SSOR が復活し、その後継続的に開催される。そうならば、筆者にとっては、やっとのこと第 33 回 SSOR 恵那の引継ぎが完了し、第 34 回にバトンタッチできた、と留飲を下げられる。コネなき子カネコの漂流はここで終わり、誰も知らない南の海へたどり着く。もっともイルカに乗るには少々年を取り過ぎてしまった。